

海外子女教育だより

気 球 船



第 204 号

平成18年12月
文部科学省
初等中等教育局
国際教育課
編集・発行
初版発行昭和62年12月

海外子女教育総合HP: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

世界の窓

ロンドン補習授業校を 巣立つ子ども達のために

ロンドン補習授業校

校長 長山 正宏

日本国内で、「補習校」という言葉を果たして何%の教員が知っているだろうか。そこではどのような子ども達が、どのような学習活動をしているかを正確に説明できる者が何人いるだろうか。ここに、ある高等部卒業生の答辞を引用し本校を紹介します。

「おはよう!!」と教室を包む、親しみなれた友人の声を聞くのも今日が最後となってしまいました。その、普段何気なく使っていた挨拶から多くの出会いがあり、様々な人たちの影響を受けてここまでできました。

次々に帰国してしまう友人との別れが辛くて、「補習校なんてもう辞めたい。」と思った時期もありました。そんな時、一人の友人にかけてもらった「偶然は必然」、という言葉が今でも忘れられません。

私たちが暮らしている生活の中で、偶然芽生えた友情から、教わることや得るものはたくさんあるはずだから、その出会いは自分にとっていつしか必然になります。今までにたくさんの別れがありました。今ではそういった一つ一つの出会いの中に大切な意味が込められていて、無駄な出会いなど一つもなかったのだと強く信じています。

～ 中略 ～

先日、卒業文集のために「私にとっての補習校」という題で作文を書く機会がありました。その時、ふと思い出したのが担任の先生に以前教

わった、川崎洋の「地下水」という詩でした。

「チーズと発音すれば笑い顔をつくることができます。でも、ほほえみはつくれません。ほほえみは気持の奥から自然に湧いてくる泉ですから。その地下水の水脈をもっているかどうかなのですから。めったに笑わない顔があります。でも澄んだきれいな眼をしています。いつも遠くをみつめていてなんだか怒っているような表情です。しかし彼は怒っているわけではありません。地下水の水脈に水を溜めている最中なのです。水が満たされて彼がほほえむのはいつの事? 誰に対して? たぶんそのために明日があります。」

この詩を思い出したとき、補習校は自分にとって大きな「心の支え」になっていたのだと、改めて感じました。つまり私にとっての補習校は、この詩の中で表現される「地下水脈」そのものだったのです。 ～ 中略 ～

また、補習校は、日本で一度も生活したことのない私に、日本語の基礎と魅力を教えてくれた上に、「外国に住む日本人」としての誇りや、物事を多角的に見つめることの大切さも教えてくれました。つまり、補習校では日本の文化や伝統を学び、現地校では多種多様な文化に触れることで、自分自身の視野が広まり、物事の善し悪しを色々な角度から判断する力が身についたのです。

時には、現地校と補習校の「両立」という二文字が、肩につらくのしかかることもありました。しかし、勉強や宿題についていけないのが嫌だから補習校を辞めるというのでは、自分の可能性を自らの手で摘み取ってしまうことになります。せめて、自分に納得がいくまで頑張らなければ後悔し残りません。

今日で補習校と別れるのは、正直言ってとても辛いです。今も、この卒業式のあとわずかな残り時間を、惜しむように数えています。

今日、私たちのためにこうして卒業式を挙げてください。先生方、ご来賓の皆様や学級委員のみなさまにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

ん。そして、何より今まで、たくさん迷惑をかけてしまったにも関わらず、支え続けてくれた父と母に。八つ当たりをしたり、心配をかけたりしたこともありましたが、しかし、どんなときでも突き放すことなく、そっと見守り、時には背中を押してくれた両親に、言葉では言い表せないくらいの感謝の気持ちでいっぱいです。厳しさを交えた両親の優しさがあったからこそ、今の私たちがあるのだと思います。こんなに成長した私たちの姿を見てください。

今日の晴れ姿を、両親と、今まで暖かい心で私たちを支え親身になってご指導くださった先生方に捧げたいと思います。

補習校での12年間は流れるように過ぎてしまいましたが、自分を見失いそうになった時、本来の自分に立ち戻らせてくれた、かけがえのない場所が補習校でした。辛いことがあるたびに心のよりどころとなっていたのは、最高の思い出をたくさん与えてくれた友達の微笑みでした。

ここでめぐりあえた永遠の友達を、私の誇りとしてしっかりと胸に刻み、今日、卒業します。

もちろん、在外教育施設ですから、卒業を待たずに去っていく子どももたくさんいますが、私たちは、本校に学ぶ子どもすべてが、このような思いで巣立っていくことを願い、日々の指導にあたっています。

本校は1965年、「在英の子女に日本語教育を」と有志が立ち上がりそれから41年の月日が過ぎ去りました。「在外で生活する子どもたちに本格的な国語教育を」という保護者の熱烈な思いを、子どもたちが素直に受けとめ、熱心に学習に励んできた姿が目目に浮かびます。そのロンドン補習授業校のDNAとも言える両者の情熱は、今に至るまで引き継がれていることを確信します。本校で学んだ児童生徒の延べ人数は数万人に達し、その一人ひとりが、個々の目標を持ちつつ学習に励み、巣立ち、多岐にわたる分野で活躍中です。

答辞の中にも見られるように、世界中にある補習校に通う子ども達にとって、現地校との両立は大きな共通の壁です。月曜日から金曜日までは現地校に通い、土曜日だけは補習校に登校する。日本から来たばかりの子は、何がどこにあるか、誰に何を聞けばよいかもわからず、学校生活習慣もまったく異なり、教室内では英語しか使え

ない状況です。

かつて、我が子を補習校に通わせた日々を、今だからこそ懐かしく思い出せます。週日は親子ともども涙を流しながら現地校の宿題に追われ、金曜日の夜は現地校の友だちからのパーティやゲーム観戦の誘いを断り、補習校の宿題に向かわなければならないことから、「魔の金曜日」という業界用語も生まれました。この状況は今も変わっていません。それでも子ども達は、翌日、一週間ぶりに仲間と再会するために、歯を食いしばって土曜日を心待ちにしているのです。「おはよう」と登校してくる子ども達の顔と、「さよなら」と去っていく子どもの大きな差は、補習校でしか見られません。

いろいろなことと戦いやがて言葉を習得し、日々成長していく彼らを支え、巣立たせるのが補習校の重大な役割です。

本校では、単に語学学校のように国語(日本語)を教えるのではなく、日本の文化や生活習慣を理解させつつ、日本人としての心がこもった国語力の育成を目指しています。そのためには、教師力の向上が重要であるとらえ平成17・18年度にわたり、海外子女教育研究協力校の指定を受け、「補習授業校における研修のあり方」をテーマに掲げ、現地採用講師への支援に関する実践を続けています。申請時、文科省からは「仮題、副題を見ますと、補習授業校の派遣教員としての当然の職務の範囲内として行うもののような印象を受けます。」と返事がありました。が、「当然ながら、本校の取組は必ずや派遣のない小規模補習校のみならず大規模校にも役立つ研究になるはず」と信じ、下記の支援に取り組みました。

支援内容は「授業参観から」と題するA4プリントを学校行事や季節業務に合わせ、毎週、各講師に資料として配布し研修しました。今年、それらは「授業参観から」という冊子にまとめられ、本校の全講師および英国内の小規模補習校の講師に配布しました。

内容は、借用校舎での教室環境の工夫、教師の立ち方・歩き方、発問の工夫、宿題の出し方、授業参観の持ち方、文字の書き方、長期休みの前の担任の声かけ等々、当たり前過ぎて何にも書かれていないが、即、教室の実務に生かされる



ノウハウを意識した内容になっています。目次についてはHPをご覧ください。
さらに、「教師力向上」のために次のような研修も行っています。

準備出勤(1・2学期の始業前週の講師研修会)

中間研修会(1・2学期、中間にある講師研修)

初任者研修会(年度初期)

自主研修(PC、プレゼン、新聞づくり)

(内容については、今年度末にHP上で公開予定です。)

(参考 = ロンドン補習授業校HP URL=

<http://www.thejapaneseschool.ltd.uk/londonhoshuko/index.htm>)



特別寄稿

いじめに負けない
強い心を持つ子の育成

イスタンブル日本人学校

校長 加賀 康弘

「どうして?」

ちょっと大げさなタイトルですが、そもそもは昨年(平成17年)の秋頃の話です。

本校は、児童生徒数65名、派遣教員10名の小さな学校です。

本校では、職員会議の後に「児童生徒情報交換会」として、各クラスの子どもの様子を知らせ合い、子どもたちの様々な情報を全教職員が共有する場を設けています。

その場で、「4月に帰国したAさんが学校を転校したようです。」という話が出ました。その時は他の教員からの質問もなくその報告だけで終わりました。

私は、会議が終わった後にその教員に話を聞くと、「学級に馴染めなくて変わったようです。いじめもあったようです。」とのことでした。他の教員にも話を聞くと、「実は、一昨年の帰国生にも同様な理由で悩んだ子がいたようです。」と話してくれました。

そこで、「どうして、その2名の生徒が転校や悩まざるを得なかったの」と問いました。すると、教員たちからは、「日本の教育環境では難しいですね。」担任の指導も悪かったようです。」といった答えが返ってきました。

「良質の教育」

本校の目的の一つに、「国内学校との円滑な接続を行う」とあります。優秀な派遣教員のもとに少人数指導を行い、手厚い教育を行っています。実際、我々は学習面においては国内校に比べても遜色なく、むしろ国内校以上の教育を行っている自信を持っています。

また、小中一貫校の特性を生かして、小1から中3までみんなで仲良く礼儀正しく温厚な子どもたちに育てています。転入当初は、ちょっと元気過ぎるかなと思った子でも、2か月もすればみんな良い子に変わってきます。

まさに、授業内容、生活指導において国内校よ

り、はるかに「良質な教育」を行っている」と自負を持っていたのです。

「欠けているものは何？」

しかし、それだけ良質の教育を行っているはずの本校から地元公立中学校に帰国した生徒が、2年連続して国内校との円滑な接続に失敗したのは事実です。

「2年連続して」に私は引っかりました。数年間に一度なら、たまたま環境が悪かったのかなで済みますが、連続してとなると本校の教育に何か欠けていると見なければなりません。

そこで、児童生徒指導部に「教育内容を見直し、本校に欠けている教育は何か。それを探りだし、欠けている教育の指導方針を出して欲しい」と伝えました。

その見直し作業の結果出てきた答えは、「困難な状況に遭遇したときの子どもの耐性が弱いのではないか」、「耐性をつけるために、時に厳しい指導をする必要があるのではないか」ということでした。

「厳しさの体験」

本校のような小規模校においては、授業や生活の場面では、「本気で厳しく叱る」場面はほとんどなく、その必要もありませんでした。

また、子どもたちにとって本気で継続して何かに打ち込むという体験も不足していました。

本年度は体育祭を拡充したために一か月間にわたり集中練習を行いました。ところが、その際に「練習が厳しすぎる」、「子どもが帰ってきて疲れて何もできない」等の多くのクレームが学校にきました。実際には、その練習も日本に比べると半分くらいの練習時間、練習量にもかかわらず、学年を問わずこのような苦情が寄せられたのでした。本来ならば、「がんばってやるのよ」と励ます側の保護者も「なんでそんなにしんどいことをしないといけないの」と言った気持ちになっているのでした。

従来の教育では、結局子どもや保護者に「厳しさ」や「しんどさ」を体験させずに帰国していたのです。

「部活動の目的」

まず、国内校に円滑な接続をするためには、今まで充分出来ていなく、今後必要であることは、環境が変わっても柔軟に適應していく子ども

を育てること」

そして何よりも大切なことは、

「どんな環境においても、自分に自信を持ち、本校で得たことを胸を張って生かせる子どもを育てること」

だと考えました。

さらに、この目的を実現するために5点の具体的な方策が出ましたが、その中で新しい取り組みとして小学部5年生以上に「部活動」を設置することにしました。

部活動の一つの目的としては、「教師の教科外に持つ専門的な知識を子どもに伝えながら、日頃の遊びとは違った関わりを持つ活動」をすることでした。

派遣教員は教科指導だけでなく、国内では部活動顧問として活躍していた者が多く、その経験を子どもたちの教育に生かせることは大きなことです。また、授業と違う顔で、厳しい指導を行う教員の姿を見せることも有効であると考えました。

「部活動で育てるもの」

目的は決まったのですが、さらに子どもたちへの「部活動」の具体的な目標を話し合いました。部活を通して仲間を作り、一人で悩まず相談できる友人を作れる子を育てる。

部活で、専門的技術を身につけることにより、自分に自信を持って生きていく子を育てる。

部活で、厳しさを体験することにより、精神的に強い子を育てる。

これら3点は、国内校に転入して、万一その環境に馴染めない状態になったことを想定しています。

「どんな部活動が出来るのか」

さて、部活動を設置するに当たって、どんな種類の部活動が設置できるのかを検討しました。

検討する上で、「派遣教員の部活動指導の専門的知識」と「継続性」を考慮しました。

その結果、以下の5つの「部」を設置しました。

バレーボール部 軟式野球部 空手部 和太鼓部 英会話部

運動部を3つ設置したのはいいのですが、問題は本校の校庭が日本の幼稚園の園庭くらいの狭い運動場しかないことでした。

しかし、この問題はどうにもならないので、「出来ないことはない。物理的に無理でも知恵を出し

てやろう」と、ちょっと強引なのですが実施することにしました。

部活動開始」

本年10月より、部活動を開始しました。部員は、バレーボール部 9名 軟式野球部 8名 空手部 11名 和太鼓部 3名 英会話部 0名となりました。やはり、運動部に人気がありました。

野球部は教員が手作りのトスバッティングのゲージを作りました。バレー部は部活用のニューボールを揃えました。

部活動の様子を一言で言えば、「学校の空気が変わった」と言えます。

部活が始まると、それまでの和やかな運動場の雰囲気が一変し、張りつめた空気に変わります。

放課後の小さな運動場に、野球部のかけ声が、バレー部の顧問の叱声が、空手の気合いが響き渡ります。

教員の本気で鍛えるという熱意が子どもたちにも伝わっているのでしょう。子どもたちの顔も真剣そのものです。運動会の練習よりも厳しい練習を週に2回、3回とやっていますが、子どもたちは誰も弱音を吐きません。保護者からの苦情もありません。

そして、休み時間や部活のない日でも自主練習に取り組む子どもたちの姿が見えます。

部活を始めて2か月、やって良かったと教職員一同思っています。

追跡調査と効果測定」

来年3月に、部活動を経験した子どもたちが10人帰ります。この子どもたちが果たして円滑に国内校に馴染めるのでしょうか。

そこで、帰国後のフォローを兼ねて、追跡調査を行い効果測定を行うことにしました。

帰国直後は、2週間毎にメールか電話で様子を聞きます。これを2か月間行い、以後1か月を目安に連絡を続け、その学期が終了するまで行います。1学期間を乗り越えれば、クラスにも馴染み、安定した学校生活を送れるのではと考えています。

部活動継続の様子と追跡調査の結果を本機関誌で、また紹介できる機会を頂きたいと思っています。

小さな学校の小さな取り組みですが、先生方の何かの参考にして頂ければ嬉しく存じます。

子どもたちを受容し、
共感し、そして支える

グアテマラ日本人学校

校長 花本 邦次

学校のコーヒーの実が赤く色づいてきました。コーヒーの実の赤と、空の青さとのコントラストが鮮やかです。この時期、空は青く澄みわたって高く大きく広がります。高く大きく広がる青空は、子どもたちの未来が無限に広がっていることを象徴しているようです。子どもたちが、未来の世界で自分らしさを発揮しながら、仲間と力を合わせて、活躍してほしいと願っています。そのために、子どもたちは心と体を鍛え、しっかりと学ぶなど、将来に雄飛するための努力に力を注がなければなりません。しかし現実には様々な困難や障害が待ち構えています。現在の子どもたちは、苦難に揉まれていない弱さがあります。ですから、困難に出会うと打ちひしがれ、且つ八方塞がりの状態に陥ったときには、残念なことに、仲の良い友だちにも、保護者など周りの大人たちにも相談できないものです。

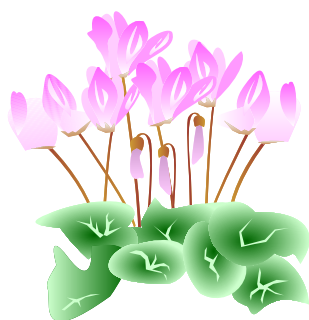
もうすぐ自分の教員生活は30年になりますが、何度もそういう状態に落ち込んでいる子どもたちに出会うことができました。なかには自殺することが予感されるほど、思い詰めている子どももいました。そういう状態の子どもを発見したとき、「あれ、おかしいぞ」、「何か変だな」、「心配だな」と子ども心の変化を感じ取ることができるか、そして子どもを救うための行動を、起こすことができるかどうか、一瞬一瞬の対応がとても重要になります。子どもの変容を感じ取れない人もいます。また、感じたとしても行動を起こす人はもっと希(まれ)です。

子どもたちの嘆きの声を感じ取り、苦しみを抜き取り、勇気と希望を引き出す関わりができる教師集団でありたいと願っています。そのためには、まず感性を磨くことが必要です。感性とは感じる心のことで、季節の移り変わり、事象の変化や人の心の変化を、鋭敏に感じ取る努力をすることで、身に付けることが可能です。そして、苦しみを取り除くためには何が必要かという、「聞く」事です。カウンセリングの基本は、聞くという行為から始まります。多くの方々も経験がおありだと思いま

すが、とても悩んでいたことが、人に聞いてもらえたということだけで、心が軽くなり、問題が解決したようにすっきりする。この聞くというのは「聴く」と書いた方が、よくご理解いただけると思います。心を澄まして、相手の苦悩に耳を傾けるというのが、本来の聞き取る行為であり、カウンセリングの基本です。聞いてもらえた人は、苦悩を取り除くことができます。さらに、自分の事を理解してもらえたと感じたとき、これを受容といいます。受容されたと感じたとき、心の底から溢れるような喜びが湧いてきます。別の言葉では、聞くということを抜苦(ばっく=苦しみを取り除く)と、受容を与楽(よろく=喜びを与える)とも表現します。悲しみや苦しみに打ちひしがれていた人が、聞いてもらうことで苦しみを取り除かれ、自分の苦しみを理解してもらえた実感したときに、前進するためのエネルギーと希望が、心の奥底から湧いてきて、生命全体を満たしていきます。

子どもたちが傷つき、困難に打ちひしがれ、希望を失いそうになったとき、そっと傍らに歩み寄り、悩みの声を聞き取れる私たちでありたいものです。そういう人に出会えた子どもは、暗夜に灯火を発見したような、安堵と喜びを手に入れることができるでしょう。そして、自分もそういう大人になりたいと願い、他の人のために尽くす、心豊かな人間に成長することでしょう。

10年前に、声にならない苦悩の声を聞き取り、そっと支えた中学生が、今年の教員採用試験に合格しました。私のように悩む子どもが、たくさんいると思います。そんな子どもに、受容し、共感し、寄り添いたいと考えました。あの時、私に接してくれた先生のような、養護教諭になりたいと思います。』との決意が、合格の報告に添えられました。



在外教育施設におけるいじめ対策について

大臣官房政策課企画官

(前ニューヨーク国際交流ディレクター)

栗原 祐司

在外教育施設でがんばっておられる派遣教員の皆さんも、インターネットや日本の新聞の衛星版などで日本の最新情報を入手していると思いますが、十月以降、教育に関する記事が多く見られるようになったと感じていることと思います。これは、先日閉会した第165回臨時国会において、およそ60年ぶりの教育基本法改正の審議が行われたことに加え、安倍総理が教育を国政の最重要課題として掲げ、官邸主導の「教育再生会議」が設けられたこと、さらに時期を同じくして児童生徒のいじめが原因と思われる自殺や自殺予告が相次いだこと、そして多くの都道府県で高等学校の必修科目の履修漏れが明らかになったことなどによるものです。

「教育再生会議」で日本人学校や補習授業校をもっと充実すべしという議論が展開される見込みは残念ながら今のところありませんが、安部総理が所信表明の中で「美しい国、日本」の魅力を世界にアピールすることの重要性を掲げ、「未来に向けた新しい日本の「カントリー・アイデンティティ」、すなわち、我が国の理念、目指すべき方向、日本らしさを世界に発信していくことが、これからの日本にとって極めて重要なことでもあります」と述べていることは、在外教育施設で勤務している方々もしっかり認識していただきたいと思います。日本人学校や補習授業校の存在や行動が、時にはその所在国において日本を代表する「顔」となり、日本文化の発信拠点となり得ることを念頭において、日本の国の名に恥じない行動を心がけてほしいものです。

さて、言うまでもなく、いじめの問題は、国内だけでなく、日本人学校や補習授業校においても起こりうる問題であり、各学校においては、子どもたちが相談しやすい体制を作ることや、子どもが発する危険信号を見逃さず早期発見を図ることが必要不可欠です。さらに、学校や学校運営委員会が問題を隠すことなく、いじめの兆候をいち早く捉え、迅速な対応を図ることはもちろん、学

校や学校運営委員会が家庭とも連携して、いじめの未然防止の取り組みを推進していくことが重要でしょう

とりわけ、日本人学校や補習授業校では、頻繁に転出入があり、国内の学校に比べてはるかに多様なバックグラウンドを持つ子どもたちが集まっていることから、生活文化や習慣の違いなどからいじめが発生する可能性があります。永住者や国際結婚子弟に対する差別なども考えられますが、言葉の問題もさることながら、人種や宗教に関するいじめや差別であった場合は、国内の外国人児童生徒に対する対応と同じく人権問題として訴訟事件に発展する可能性もありますので、日頃から指導の徹底を図る必要があります。言うまでもなく、派遣教員自身がそのような言動をとることがあってはなりません。

また、同じ学校の教員の子もどうしが同じ教室で学ぶという機会は国内ではほとんどないと思いますが、規模の小さな日本人学校では十分にあり得ます。もし、教員の子もどうしのいじめが発生した場合は、それこそ派遣教員の面子丸つぶれとなりますので、十分に気をつけていただきたいと思います。改めて、派遣教員の配偶者やその子どもは、緑色のパスポート(公用旅券)で渡航しているということを忘れないようにしていただきたいと思います。



トピック

第30回東アジア・大洋州地区日本人学校校長研究協議会に出席して

グアム日本人学校
校長 吉崎 隆夫

熱風とほのかな香料に包まれたスカルノハツ空港に降り立ったのは夕刻時、あたりはほの暗くふと海外安全情報が脳裏をかすめる。しかし、幹事校の首尾良い手配で会場行き専用タクシーに乗車し、小1時間ジャカルタ市街を車窓より散見した。数日前に発生した小規模な自爆事件やブッシュ米大統領訪問を一週間後に控えデモ行動の緊張感が漂う中で、記念すべき第30回東アジア・大洋州地区校長研究協議会が11年ぶりに当地で開催された。

協議会一日目(開会式)

桐生会長、総領事、学校維持会理事長、文化センター所長より祝辞・挨拶を頂戴し、粛々と開会式が執り行われた。続いて外務省の辻室長、文部科学省の酒井係長、国立特殊教育総合研究所の小田理事長、海外子女教育振興財団の根道専務理事より最近の国内の教育事情やそれに伴う在外教育施設の動向など貴重な情報提供をいただいた。

クアラルンプールの小松校長より実践報告がなされ、日本人学校の位置づけを教育指導面と経営的な側面から検討を加えられ、特色ある取り組みの紹介と外国人児童生徒の受入に伴う成果と諸問題について報告された。これを受ける形で、文部科学省教職員派遣係長酒井氏から今年度の提案協議「魅力ある日本人学校づくりの工夫について」提案がなされた。日本人学校の児童生徒数が減少傾向にある背景と在留邦人保護者が学校に求めるニーズから、これからの魅力ある学校づくりを推進するための方策や経営の改善に向けて活発な意見交換と検討協議が図られた。各校の工夫された実績報告に多くを学ぶことができとても意義深い全体協議会となった。

後半の分科会協議会は事前に提出された各校の実情から現在抱える運営上の課題を共通認識して協議を深めた。その結果、柔軟性のある対

応と工夫された取り組み、そして、新たな試みと改善点などが紹介され、解決すべき課題に大きく迫ることができた。早速に各々が持ち帰り明日への確かな教育実践に生かすことができる見通しを得たことに心を強くした。

協議会二日目 (ジャカルタ日本人学校訪問)

会場よりバス移動、当たり前のように隙間なく割り込んでくるオートバイに日々のたゆまない人々の逞しさを感じ取りながら、ジャカルタの生活のにおいを漂わせる通りや民家を過ぎること一時間、とたんに閑静な通りに入ると整然と整備された白い学舎が見えてきた。厳重な警備の中、この素晴らしい環境に860余名の児童生徒が学んでいる。

第2体育館で全体説明会と発表会が行われ、6年生による民族楽器の演奏と伝統舞踊の披露がなされた。海外生活の特性を生かし、国際性豊かな日本人の育成を目標に「総合的な学習の時間・生活科」の活動を中心として系統的に研究推進が図られている。全学年の公開授業では、子どもが主体的に学び得るよう指導や学習形態に工夫がなされ、整理された学習環境が形成されていた。

学校は子どもの実態を正確に把握し、組織的且つ計画的に教育活動が実施できることが極めて重要であることを改めて考えさせられた。

協議会三日目 (閉会式)

二日間にわたり熱心に討議された分科会のまとめ報告がなされ、各校の学校運営に具体的な参考となり得た。指導・講評の中で外国人児童生徒の受け入れ体制については、財政的な裏付けや人的配慮の必要性など、学校として克服しなければならない教育課題を加えた上で、学校運営委員会で協議を重ねる必要があることが確認された。

配偶者研修会

初日、文部科学省の酒井氏が海外子女の実態、配偶者の心得を具体の例をもとに講話をしてくださり、身の引き締まる思いで耳を傾け対応の在り方を学び合うことができた。

分科会では現状と課題、日本人社会での配偶者の役割を学校規模別に協議できたことはとても身近に感じられ大いに参考となった。

二日目、ジャカルタ日本人学校の訪問では新しく移転された幼稚園を見学する機会に恵まれた。世界にある日本人学校の最も大きな幼稚園であるだけに施設・設備が充実し、そこで学ぶ園児のいきいきとした活動ぶりが印象的であった。

最終日、管理職配偶者としての立場と役割の情報を交換し、閉会式に合流した。

閉会式では北京グループ山口副会長より次期開催の御挨拶を頂き成功裡に本大会の幕を閉じることができた。改めて来賓、関係者の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

国際教育課「気球船」編集部

本誌への御意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。

連絡先 E-mail:kokukyo@mext.go.jp

こちらも随時募集中です。

投稿記事

(原稿料は出ません。ご了承ください。)

新規配信配信依頼

お願い

- ・本誌は、回覧、転送等して、多くの方でご覧ください。
- ・特に断り書きのない記事については、転載は自由です。

編集後記

今月号は、「いじめ」に関する寄稿が3本ありました。関係者の方々が、この問題にいかに切実に受け止め、真剣に対応しているかがわかります。

そして、教育の話題といえば、「改正教育基本法」。改正を受け、「文部科学大臣談話」が掲載されています。

http://www.mext.go.jp/b_menu/soshiki/daijin/ibuki/06121510.htm

(N)

～ 12月号の内容 ～

【世界の窓】 —————1

ロンドン補習授業校を築立つ

子ども達のために -----1

ロンドン補習授業校

校長 長山 正宏

【特別寄稿】 —————3

いじめに負けない強い心を

持つ子の育成 -----3

イスタンブル日本人学校

校長 加賀 康弘

子どもたちを受容し、共感し、

そして支える -----5

グアテマラ日本人学校

校長 花本 邦次

在外教育施設におけるいじめ

対策について -----6

大臣官房政策課企画官

(前ニューヨーク国際交流ディレクター)

栗原 祐司

【ピックアップ】 —————7

第30回東アジア・大洋州地区日本人学校

校長研究協議会に出席して -----7

グアム日本人学校

校長 吉崎 隆夫

編集後記 —————8

